

## 各年度リーダー部活動の記録

35年度	春山合宿遭難について……………	故 小林喜芳
36年度	部活動を振り返って……………	山田和彦
37年度	活動報告……………	西郡光昭
38年度	部活動総括……………	サブリーダー 松尾武久
39年度	リーダーの反省……………	松尾武久
40年度	部活動総括……………	サブリーダー 故 小川 勝
42年度	部活動総括……………	扇能 清
43年度	部活動総括……………	小野田譲治
44年度	部活動報告……………	武藤一郎
45年度	部活動報告……………	井関芳郎
46年度	部活動報告……………	三坂健次
	部活総括……………	大安徹雄
47年度	思い出……………	小根田一郎
	活動報告……………	サブリーダー 大安徹雄
50年度	活動報告……………	吉田秀樹
52年度	リーダー雑感……………	師田信人
53年度	リーダー雑感……………	下田 章

## 昭和 35 (1960) 年度 春山合宿遭難について

昭和 29 年入部 文理学部史学科 故 小林喜芳

これは報告 No.1 に掲載された「信州大学松本山岳部設立以後の動向と今後の行き方」の中の 35 年度山行の春山遭難についての記述であり、2005 年に亡くなった小林喜芳さんの遺稿である。

穂高におけるこの遭難の反省の上に立ち、伊那松本山岳部が発足してきたのである。

3 月、春山合宿は北鎌尾根より明神岳までのキレット経由縦走コースを軸に、槍沢サポートから裏銀へ抜けるパーティーと、涸沢から穂高小屋サポートパーティーの 2 つを加えて予定された。縦走隊は予定の大半を終了したが、最高ピークの奥穂高岳を越して、スリップ事故を惹起し中断されたのである。

細目にわたっては他の報告に詳しいので省くが、事故は二重遭難の形で起こった。第一が単純なスリップと転倒墜死であり、第二は救援体勢の失敗によるスリップ墜死である。共に基本的な意味において、精神的弛緩と基本技術の失敗に原因を還元することはできる。決定的瞬間においては個人の遭難である。しかし、彼らが部に在籍した以上、部にもその原因は無関係ではない。合宿そのものが部の責任において実行されつつある以上、成功と同様失敗に関しても共同の責任の中にあるのは当然である。

彼らが直接犯した失敗の原因を生むような風土が存在したことを反省する必要がある。即ち予定の大半を経過したことにより精神のゆるみを生んだことに対する、あるいは基本的技術をゆるがせにすることに対処するような方法論が部には無いのである。基本的な技術規範など具体化し得るものでも部には存在しないのである。実際、彼らが技術なり山行態度なりを基本的なものから段階的にでも十分修得して部の上級部員と認められて

きたのかということになると全く資料は皆無である。ただ感覚的に「彼らは何年部員だから、そうしてきたかもしれない」と思うに留まるのである。

ここでも年来の新入部員温存による山行態度や、基礎技術の欠如が問題になりはしまいか。山行に厳しい慎重さをもって臨む必要があることは承知しながらも徹底した態度が部の基調としてみられるとはいえない。部の雰囲気甘さの中に安住してしまっていることに少なからず不安なものを感じていた矢先の、これは余りにも貴重な犠牲ではあった。我々は去った人に鞭打つというのではなく、事故の原因を明確に認識するなかで、未来の遭難を起こさないという決意をもつとともに、その精神を具体化した方法論を確立する責任を持っている。

遭難反省会が現部員を中心に非常な熱意を注いでおこなわれた。事故報告、反省の後、ストップ技術・コンテナス技術の訓練の強化を確認、山行についての計画と反省の徹底、リーダーシップについて部としての方法、メンバーシップについて個人の自覚に俟つとされていた技術の向上と均等化をはかる等々、遭難によって露呈した矛盾を赤裸々に分析する中で将来の建設的意見がある程度纏められ、その意を十分生かす新役員会を選出し、技術憲章ともいべきものを成文化することを付帯任務として発足させた。

続いて 5 月の定例合宿を中止し、技術憲章草案を実験する目的で旧部員の殆どが岳沢に入った。その結果作成されたのが、遭難報告の最後に載った山岳部綱領である。文章上、あるいは内容自体に外部から見た場合、問題が残っていることもあろうが、現在の我々の努力の結果であり大方のご批判、ご鞭撻を期して待つ次第である。

## 昭和 36（1961）年度 部活動を振り返って

リーダー 山田和彦

昭和 36 年度は、36 年 3 月の春山合宿での穂高吊り尾根から CL 岩本、部のエースであった伊藤両名が滑落、死亡という遭難事故を総括し、二度と遭難をおこさないという部員の決意を綱領として作成することから始まった。

部の存続さえあやぶまれたが、幸いにも、また、大勢のイキのいい新入部員を迎えることができた。

テーマは綱領の実行であったが、同時に山を楽しむことを基本においた。以前からそうであったが、新人に重い荷物を背負わせてシゴクようなことはせず、むしろ 2 年部員には大きく伸びてほしいとの思いから、多少つらくあたったと思う。

冬からは伊那との合併を前提に合同で合宿するようになり、部員数も多く、それぞれ個性的でアクティブで活気があった。山岳部のひとつのピークをむかえつつあるような気がしていた。

### 36 年度の活動概略補足

松尾武久

36 年度は、4 月の穂高吊り尾根での遭難直後の年度であった。松本山岳部は 4 年生の山田和彦、斉田担男、3 年生の後藤紀彦、小林実、2 年生の西郡光昭、小谷雅宣、池田直弥を中心として再起を期した。5 月には岳沢にて、12 名の旧人の基礎技術の再確認と研修、遭難者の遺品捜査を行った。この合宿には、農学部 3 年生の葛西正美、主計勤也を中心とする伊那山岳部も参加し合同で行なわれた。

その後、遭難の反省に立ち、5 月 13 日に松本山岳部綱領が作成され、遵守を心に誓った。

今年度は、新人を募集するかどうかの議論もあったが、部の存続のためにも募集を行うことに

なり、募集を行なったところ 14 名の新人が入部し、部にも活気が戻ってきた。

6 月には、横尾をベースに新人合宿が行なわれた。総勢 22 名が参加して涸沢中心で雪上訓練を行い、ストップ技術やザイルワークの技術訓練を行なった。

夏山合宿は、八方尾根から唐松岳、祖母谷を経て、櫻平、そして関電のトロッコに乗って（当時はまだ乗せてくれた）阿曾原へ出て、仙人池、剣沢、剣岳、立山から薬師岳を経て槍ヶ岳、そして上高地の縦走合宿を行い、徐々にではあるが力をつけてくるようになった。

そのころから、伊那山岳部との合併が議論されだし、合宿をともに行い、来年度から統合するとの方針が出て、10 月の奥又白岩登り合宿は、奥又白の池の畔に、テントを並べての合宿となった。登山活動は、それぞれのリーダーが違ったが、全員松本山岳部で同じ釜の飯を喰った仲間であることから朝・晩と一緒に会話がなされ、松本山岳部の 1 年生も次第に同化して行った。

以降、冬山、春山とも合同で一人のリーダーのもと合宿が行なわれることになった。

冬山は、松本平からいつも見ている前アルプス、餓鬼岳から燕岳を経て、常念岳から霞沢岳の全山縦走が計画され、11 月初旬に餓鬼岳、霞沢岳の偵察山行が行なわれ、核心部分のルートが確認でき、周到な準備を進めたのであった。

冬山合宿は、全体のリーダーは松本山岳部の後藤紀彦がやり、伊那山岳部の葛西正美がリーダーとなる縦走隊と小林実リーダーの餓鬼岳、後藤紀彦リーダーの燕岳、主計勤也リーダーの蝶ヶ岳の三つのサポート隊が編成され、厳しい寒さや激しいラッセルに苦労を重ねたが、無事所期の目的を達成し、充実した山行となった。

春山合宿は、伊那山岳部の葛西正美がリーダーとなり、中央アルプス空木岳から木曾駒ヶ岳までの極地法登山を計画し、宝剣岳の中央ルンゼおよび左稜の積雪期登攀を試みた。池山尾根 2050m に BC、駒石に C1、木曾殿越に C2、檜尾の頭に C3、極楽平に C4 をおいて、木曾駒ヶ岳と宝剣岳にアタックする布陣であった。北アルプスを越えてくる冷たい西風に凍傷になる者も多かったが、計画通り所期の目的を達成し、伊那山岳部と松本山岳部が一つとなってもやっていると確信した合宿でもあった。



●池山尾根 BC を撤収して合宿も終わり

## 昭和 37 (1962) 年度 活動報告

リーダー 西郡光昭

### 昭和 37 年度活動計画

信大伊那松本山岳部発足初年度の活動基本計画を次のように定めた。

伊那－松本の連絡を密にするために

1. 総会（例会）を毎月 1 回開く。
  2. リーダー会を毎週開く。
- さらに
3. 新人担当を決め、新入部員のトレーニング、山行の相談などにあたり、ギャップの生じないように努力する。
  4. 上級部員も合宿には可能な限り参加する。

次に部の年間計画を凡そ次のように設定した。

1. 本年度は伊那、松本両山岳部の合併で新体制を整えることに最善を尽くすこととする。

山行計画として

2. 新人合宿：例年通り行うが、多数の新入部員が見込まれたことにより、新人合宿に必要な装備などの調達が遅れることなどの理由で 5 月の

連休ではなく、5 月末～6 月はじめに横尾をベース・キャンプにして涸沢周辺で行う。

3. 夏山合宿：例年どおりの縦走は複数のパーティーに分けておこなうほかに、定着合宿を取り入れる。例年の奥又白谷合宿は OB に参加を呼びかけて 8 月中旬に 10 日間の予定で行う。
4. 秋山合宿：10 月に 1 週間程度で 1 年生を中心として岩に親しむ合宿を奥又白谷で行う。
5. 春山合宿：3 月～4 月 後立山連峰、梅池－白馬岳－鹿島槍ヶ岳に極地法登山を展開する。（この中に鹿島槍ヶ岳北壁のいずれかのルートを入れることができれば理想的）
6. その他：従来から行われている上高地サマーテントは例年通り行う。

### 昭和 37 年度活動報告

1. 新人合宿：新入部員 29 名を迎え総勢 51 名にのぼる大規模なものだったが、計画どおり 5 月末から 6 月はじめにかけて 8 日間の日程で、横尾谷にベース・キャンプを設け涸沢を中心に行われた。

多数にのぼる新入部員の基礎訓練が主なものだったため、上級部員の練成まで手がまわらなかったのは如何ともしがたかった。

全体を4パーティに分け、それぞれが自主的に行動できるよう配慮したつもりだったが、島々から徳本峠越えの初日からこの一本道での長い隊列でこのもくろみは効果が得られなかった。

合宿中、新人には涸沢での雪上訓練と槍ヶ岳、北穂高岳、涸沢岳登山を、上級部員には彼らのコーチングのほかに、若干のバリエーション・ルートを加えた登山をしてもらったが、内容的には例年よりグレードアップしたものではなかった点、申し訳ないと思った。

2. 夏山合宿：年間計画で縦走と定着の合宿を組み合わせた理由は、5～6月の軟雪上での訓練のみでは堅雪に対処できるだけの技術が身につくかどうか疑問であり、夏季の雪上訓練が必要ではないかとの意見が出ていたことと、1年生にも岩稜歩きを経験してもらいたいという2つの理由があったからである。

この夏は体力の消耗度を考えて縦走の前に定着を行うよう計画した。定着合宿は、穂高周辺（涸沢谷BC）と、余り経験のない劔岳（真砂沢BC）の2つを選んだ。

(1) 穂高岳定着は7月14日～7月21日、18名で行った。合宿半ばの7月18日、1年部員がアズキ沢上部を下降中グリセードの失敗から転倒しベルグシュレントに転落し、右足首を骨折した。我々の手で上高地まで搬送し病院まで運んだが、これによるショックは大きかった。

この定着では身体の不調を訴えるものも多く、この後に続く縦走にもブレーキとなった。雪上訓練は予定どおり行えたが、上級部員の練成には物足りなかった。また、多人数参加の合宿はいきおい小パーティに分けた行動になりがちだが、その際のリーダーシップ、メンバーシップのあり方が反省点としてあげられた。

(2) 劔岳定着は7月13日～7月21日、OB一名を加えた14名が参加した。池の谷、ハッ峰、源次郎尾根、チンネ、立山川等を広くトレースし、劔岳の概念把握には有益であった。

しかし、ここでもスノーブリッジを踏み抜いて転落するアクシデントがあり、大事には至らなかったものの、慎重さを欠いた行動だったのではないかと指摘された。さらに、やはり身体の故障者も多く見られ、休養をとる者もでたりして、日頃のトレーニングや健康管理の重要性が改めて問われたことであった。

(3) 縦走は3パーティに分けて行われた。

1) 劔岳－後立山縦走：劔岳定着合宿に続いて7月21日～7月29日、11名の参加で行われた。真砂沢出合いから五色ヶ原経由で平の渡をわたり針ノ木谷から針ノ木岳へ登って白馬大池まで縦走し、ここから雪倉岳を往復して樽池から下山した。途中、体調悪く下山した者が2名でたがどうやら終了した。

2) 南アルプス全山縦走：7月25日～8月7日、8名の参加。戸台口より入山し北沢峠から甲斐駒ヶ岳往復後、仙丈岳から両股へ下り、左股を登って北岳に至り、間ノ岳より農鳥岳を往復、熊ノ平を経て塩見岳、荒川岳、聖岳、光岳を縦走し百俣沢の頭より千頭ダムへ下る。体調の悪い1名が途中下山した。

3) 裏銀座－後立山縦走：穂高岳定着につづいて行われた。7月23日～8月1日。

横尾から槍ヶ岳へ出て、裏銀座コースから南沢出合いに出て針ノ木岳、後立山連峰を縦走し白馬岳から大雪溪を下る。参加者10名。

(4) 夏季奥又白谷合宿

8月6日～17日 恒例の岩登り合宿 現役は2年部員以上13名、OB6名の参加。

前穂高岳東面での岩登りを楽しんだ。前穂高岳北尾根、四峰正面岩壁を経験する部員が増え、Dフェース中央ルート（信大ルート）開拓や右岩稜左カンテルート完登など、意欲的な岩登りが行われた。

### 3. 秋山合宿

(1) 奥又白谷合宿：9月30日～10月7日 18名参加

夏の岩登りより容易なルートの登攀で全体のレベル・アップを図ったものであったので1年部員の多数参加が何よりの収穫であった。第一尾根支稜、前穂高岳北尾根六峰コンタクトラインに新ルートが開かれた。

(2) 烏帽子岳－槍・穂高連峰－奥又白池縦走：9月30日～10月7日 6名参加

夏山縦走で途中下山した者、さらに体力養成が必要な者を対象にした練成合宿を行ったもの。

4. 春山偵察山行：10月17日～10月21日 4名

春山合宿で鹿島槍ヶ岳北壁のルートに登る計画のための偵察行。白岳からキレット沢を下降し北壁主稜、洞窟尾根にとり付いたが天候悪化のため下降した。

5. 冬山偵察山行：10月19日～10月23日 9名

冬山合宿に予定している白馬岳、杓子岳東面を偵察した。杓子尾根から杓子岳、白馬岳三合尾根および主稜から頂上に達したが、杓子岳東面は冬季では雪崩の危険が高いと判断し計画から除外することとした。

6. 11月新人強化縦走

7. 冬山合宿

今冬は久しぶりに2年以上の部員の多数参加が見込まれたので、白馬岳のバリエーション・ルート－主稜と三合尾根に登る計画を立てた。

初めての冬山をむかえる1年生部員には積雪期登山の基礎を学んでもらうため、蝶ヶ岳・常念岳－大滝山から徳本峠のルートをトレースしてもらうことにした。

(1) 白馬岳定着合宿：12月23日～1月5日 参

加者11名、OB1名

猿倉にベース・キャンプをつくり、12月28日アタック隊4名で白馬岳主稜にとりつきビバークの後白馬岳頂上に達し、大雪渓を駆け下る。

12月30日から悪天候で三合尾根は登れず下山する。主稜と三合尾根は同時にアタックすべきであったが、指揮のまずさで失敗。

(2) 蝶ヶ岳－常念岳縦走：新人11名に6名の上級生がついて縦走。12月23日～1月2日

蝶ヶ岳－常念岳は若干のアイゼン技術の練習にはなったが、大滝山－徳本峠はラッセルのみである。所期の目標は一応達したとはいうものの、冬山合宿を2パーティーに分ける必要があったのかという疑問が残った。白馬でも1年生の訓練の場が十分あったのではなかったか。

8. 春山合宿

年度当初、拇池－白馬岳－鹿島槍ヶ岳の計画立案にあたって、このルートを極地法で行うことの意義について議論が交わされた。このルートを極地法で往復する必然性は何かということである。鹿島槍ヶ岳まで到達することが最終の目標であるならば、縦走パーティを編成し、必要なルートからサポート隊を入れるほうが目的にかなっているのではないかということであった。この意見はもっともであり、その意味ではこの春山計画は少しく時代主義の感があった。

それを承知の上でこの極地法を取り入れることにしたのは、これまで、松本山岳部、伊那山岳部の両山岳部の登山においては極地法の経験がほとんどなかったこと、この合宿でノウハウを勉強したいと考えたからであった。確かに、効率からいえば大きな規模になる極地法が相応しいかは疑問であった。

10月に行った偵察の結果、鹿島槍ヶ岳北壁の登攀を計画に組み入れることはできなかったが、極地法はぜひ成功させたいと考えた。計画の実施は3月9日～3月30日、参加部員24名、資材合計は1トンという大合宿となった。

梅池にベース・キャンプ、C1 白馬大池、C2 白馬岳、C3 天狗の頭、C4 唐松岳、C5 (アタック・キャンプ) 五竜岳へと前進キャンプをつくり、BC 建設後 13 日目の 3 月 21 日、鹿島槍ヶ岳に達した。なお、ベース・キャンプを除くすべての前進基地には雪洞を利用した。

一つの山行にこれほどの部員が参加することは、新人合宿を除いては例がないと思われるが、この山行が、ともかく極地法の一応の区切りとなったことは確かであろう。今後の山行にこの経験を活かしていけるであろうと考える。

### この一年をふりかえって

とにかく大忙しの一年であった。多数の新人部員を迎えて、伊那-松本の連絡、例年より回数を多く計画したため落ち着く間もなく一年が過ぎてしまった。リーダー会や総会の回数が大幅に増えたのは、前にも記したように合併後の意志の疎通を欠かすことをおそれたからである。また、合宿

の回数を増やして練成の連続となったのは、正直いって余りに多い新入部員が少しでも減ってくれば、と願ったためであることを白状しなければならない。

合宿にあたってはできる限りの努力をしたつもりではあったが、伊那、松本の連絡の不備があらわれて入山前や入山中のトラブルが再三にわたっておこり、そのつどため息をつかざるを得なかった。

春山合宿のように、いたずらに大規模な山行を計画することへの反省や批判が年度総括ででも当然のことではあった。38 年度の年間計画を検討するにあたって、個人山行や分散山行を重視し、部員の自主性を尊重する基調に変化しようとするのは自然なことであり、大変大事なことであると考える。

ともあれ、この一年を何とか乗り切ったことを幸いに思い、部員の協力と OB のご指導に深く感謝の意を表したい。

## 昭和 38 (1963) 年度 部活動総括

サブリーダー 松尾武久

伊那山岳部 (農学部) と松本山岳部 (文理学部・医学部) の合併以来 2 年目の今年度は、さらにその絆を強くし、より一層高度な山行を目指すことになった。

4 年部員の小谷雅宣をチーフリーダーとして、3 年部員のサブリーダーを松本側が松尾武久、伊那側が出島五郎という陣容でスタートした。

古参部員は山田和彦、斉田担男、4 年生には、小谷雅宣、西郡光昭、出島五郎、池田直弥、寺田雅治、小川永行、奥嶋啓志、川崎誠、新幸美、宮内宣雄、玉井洋明、砂川祐司とそうそうたる顔が揃い、3 年生には、柴田武明、川治晴彦、田中正治、平邦彦、板谷真人、真野孝一、松尾武久、2 年生

には、宮崎敏孝、小川勝、西阪孚、新谷剛、中邨康文、松井康彦、三谷潤次そして新人として、中村洋、福原正昭、宇都宮昭義他 4 名、合計 7 名が入部した。各学年万遍なく人数が揃い伊那松本山岳部の発展期に入って来たように感じられた。

新人合宿と冬山合宿、春山合宿は部全体で行う合宿とし、後の合宿は大幅な分散合宿とすることになった。個人山行も大いに推奨し、全国各地に足を伸ばすことになった。

新人合宿は、穂高岳沢で実施し、綱領に定める基礎技術の修得に努めた。

6月合宿は、上級生は奥又白岩登り合宿、新人には、中央アルプス全山縦走と表銀座縦走を計画し、それぞれ希望の縦走に手を上げることが出来た。

夏山合宿は、剣沢合宿を取り上げ、更に雪上訓練と岩登り技術の練磨に努め、体力増強の縦走合宿には、北アルプス縦走を2パーティー、南アルプス縦走を1パーティーを計画し実行した。少人数での合宿は、上下間の意思疎通が図られ一体感の高揚に役立った。上級生は、例年の如く奥又白岩登り合宿を行い、岩登り技術のさらなるアップを目指した。

秋山合宿は、鋸岳の縦走、南アルプス北部地域の横断、後立山縦走の3パーティを計画し、涸沢定着合宿で滝谷と奥又白で、岩登り技術を磨いた。岩登りといえば奥又白という我が部であるが、滝谷の岩登りにも挑戦したのであった。

冬山合宿は、部始まって以来の南アルプス北部合宿を行った。伊那山岳部と一緒にになったからには、伊那の町からいつも見える南アルプスの積雪期合宿を是非やろうとの3年部員の総意でもあった。

この合宿のリーダーを務めた真野孝一は、報告書のなかで次のように総括している。

「我々の部は、無雪期の合宿として今までに幾度と無く南アルプスの合宿を持った。南アルプスの持つ良さが分かりかけてきたのが現状である。しかし、積雪期の合宿は今までに一度も持ったことはなかった。したがって、四季を通じての南アルプスを知りたいと思うのは当然であった。この南アルプスで、上級部員も新人部員も十分な成果を挙げえる場所として、その北端の北沢峠を中心とした、我が部初めての合宿を持った。

方式も北沢峠にBCを張って、定着を行い、その後2パーティーに分かれて縦走するという形式をとった。また、上級部員を対象として岩稜歩きとして北岳、鋸岳、岩登りとして摩利支天峰、また新人部員として仙丈岳、甲斐駒ヶ岳、早川尾根を選んだ。

しかし、長期天気予報にもかかわらず、今年は例年に比べて雪が少なく、なんだか物足らなかった感が残った。この南アルプス合宿では、冬山特有のあの寒く、晴れていても弱々しい感じのする太陽はなく、春山を思わせる山行であった。しかし、仙丈ヶ岳へ登ったとき、または縦走での体験は冬山の断片に触れ得たと思う。南アルプスの特徴として、西高東低の冬山の気象配置になると、非常に強い西風が吹き、快晴でも動けないことがあることが分かった。今回の合宿は、非常に良い条件の下に行われたのであって、これが本来の南アルプスの姿ではないと思う。今後も決して悔ることなく、万全の体制のもとに南アルプスに入ってもらいたいと思う」

山行概略は、本隊は戸台から北沢峠に入り、ベースキャンプを設置。もう一隊は鋸岳から北沢峠へ、本隊と合流。その後、甲斐駒ヶ岳摩利支天峰、南西稜・中央壁アタック、仙丈岳、甲斐駒ヶ岳登頂。定着合宿終了後、2隊に分れ、一隊は早川尾根を経て夜叉神峠・芦安まで縦走、もう一隊は小太郎尾根を経て北岳經由夜叉神峠・芦安まで縦走、合流といったものであった。

当時、新人として合宿に参加した宇都宮昭義は、それでも冬山の厳しさを感じた思いを次のように述べている。

「仙丈岳行きのこと。12月21日、真野、板谷、西阪と1年3人、残念なことに仙丈岳直下で引き返す。風雪のためとはいえ、はなはだ残念だったが、真野さんが「また来ればよい」の言葉、頂上直下で引き返すことの難しさを知る。でも、天気もだんだんひどくなり、森林限界あたりまで来たときには、モロだったので引き返して良かったと思った。でも仙丈岳には一度借りが出来たような気がした。12月25日、摩利支天のアタックが終わったあとで、全員で仙丈岳に行った。前回と異なりとても良い天気。トレースもずっとついており、得したみたいだった。二度の仙丈岳行きを比較して、同じ山でも天候の違いによって、このように登るのに困難さが異なると思ったら、すこし



恐ろしくなった。また良い経験をしたと思った」

春山合宿は、35年度の遭難以来の穂高連峰で合宿をおこなった。悪天候に悩まされた合宿であった。(詳細は山行記録抜粋の項の38年度春山を参照のこと)

A沢経由東壁B、Aフェース登攀は、胸まで入るラッセルとなるため、計画を断念した。奥穂高岳を経て西穂高岳までの縦走は、吊り尾根の積雪は風で飛ばされており、クラストの斜面トラバースを想定していたのが、実際は猛烈なラッセルの連続で、リッジどおしをルートにしなければならぬとは、全く考えてなかった。結果としては奥穂高岳頂上経由、予定外の潤沢から上高地へ

と下山することになったが、自然というのは予想外のことが起こることを身をもって体験した合宿であった。

今年度は、昨年度に引き続き安全山行を実行した一年であった。伊那と松本の間の意思疎通は、お互いの努力により上手くいきた年度でもあった。個人の負担によるところがまだ多かったが、一つの山岳部という3年部員、2年部員の意識が強かったことも大きな支えであった。また、伊那や松本で夜に酒をのむとき、海外遠征の夢やヒマラヤの話がでるようになったのもこの頃からであった。

## 昭和39(1964)年度 リーダーの反省

リーダー 松尾武久

昭和39年度の思い出を執筆するに当たり、元リーダーとしていろいろと考えたが、実に42年ぶりに若かりし頃の「39年度を顧みて」という反省文の原稿が出てきた。当時、何を考えて部の運営をやっていたのかが良く分かるので、これを発表することが、薄れてきた記憶を辿るより一番良いのではと考えた。その年度の最終に、サブリーダー、装備係、記録係等にまで全員に反省文を書かせたようである。

前年度の小谷雅宣よりリーダーを引き継ぎ、ファイトを持ってやろうと努力してきた。僕は僕なりのリーダーとしての考え方でやってきたのである。もちろん、教えて頂いた小谷雅宣や西郡光昭の考え方とほぼ同一路線であった。

我々の部はまだまだ発展段階であり、我々の新しい試みは、いろいろな困難もあり、批判もあると思うが、来年度のリーダー級の部員がそれを踏み越えて、なお一層の発展の方向に持って行ってほしい。

それには一年の反省は是非必要であると感じたので、ここに各係と各学年の反省を纏めたのである。この反省をよく理解して、過ちを二度と繰り返してもらいたくないと希望するものである。

この一年の結果は、山岳部がスポーツという分野と生活の分野を併せ持っているので、複雑であり、一つに纏めるのにこれ程難しい部はないと感じたことと、経験もない4年生ではリーダーはなかなか難しいと感じたことである。幸い僕の場合は5年生部員の心ある温かい助言と、サブリーダーの強い支援があったため、部の重要なポイントだけを押さえるだけでよかった。しかし、自己の反省としては、それをよいことにしてチャランポランにしたような所もあり、甚だ残念である。

部の発展は、一時代だけでは決して基礎はできないのは明白である。僕はそれゆえ何か一つだけでも目標を達成しようと思い、いろいろと僕なりの目標を作った。

- ①総会を定刻に始めること
- ②4年部員、5年部員の部からの遊離を許さな

い

- ③レポーターを指定し、山の知識をいろいろ深めたい
- ④サブリーダーの活動を活発にするため、出来る限り権限を委任する
- ⑤部員の自発に基づく自発的な山行を認める以上のようなものであった。

①に関しては、何とか出来たような気がする。しかし、まだ一ヶ月にっぺんの総会を無断で欠席する者が居たのは残念であった。

②については、昨年度までの状態では、部の発展はありえないと考えたのである。これは最後の春山まで4年・5年部員が真剣に考えてくれたので、良い前例が出来たと思っている。

③これは、10月ころから始めたのであるが、山行の発表だけに終わってしまう傾向の強い総会をもっと建設的なものにしたかったからである。これは来年度も続けていただいでこそ、本来の力が発揮できるのではないかと考えている。部員はレポーターになったら絶対に責任を持って、期限までに発表してもらいたいものである。

④これは3年部員の認識が非常に高かったので問題はなかった。良くやってくれたと思っている。

⑤については自主性というものが、本来部員としての性格上、やるべきことをやった後の自主性でなければならないのに、自主性とは放任であるような印象を2年生、1年生に与えたことはリーダーとしての不徳のいたすところであった。我々の部は自主性を重んじる部であるから、全員そのことをしっかり考えて頂きたい問題である。

我々の部は、伊那と松本に分かれ、地理的なギャップはどうしようもない。合併以来、連絡面で常々やかましく言われてきたがなかなか出来なかった。3年目にしてどうやらうまくいったように見える。しかし、これも裏を返せば、特定の部員の働きに寄りかかっているため、まだまだ問題

となるべき点である。これは部員が本当に真剣に考える問題である。

SACの問題も、来年度は考えるべき問題である。遭難をきっかけに統合の方向に動いているようであるが、我々の部としての意見をガッチリと纏めておく必要がある。リーダーは部員の考え方をしっかり理解しておかねばならない。

山行の面も、分散山行でいろいろ広く山を知ろうとすることは大学山岳部の本質でもあるので、おおいに結構である。だが、分散は部がしっかりとまとまっていないと、本来の特質を引き出すことは難しい。この点も部員全体で考えてもらいたい。それにあわせて我々の部も、山行の面だけ捉えず、大学山岳部というものの考え方を一本にしぼり、学生しかできないといったユニークなものをやりだしてはどうだろうか。

遭難防止、部室、部報等問題は山積みである。来年度はこれらを一挙に解決しようとするのではなく、腰を落ち着けて処理していただきたい。これ等の解決はリーダー部員だけに任せず、1年生は1年生なりに、2年生は2年生なりに考えて欲しい問題である。

とにかくリーダーの任務は、部員の支援なくしては遂行できないものであり、リーダーの考え方が部員と分離しているのでは部の発展はありえないのである。

終わりに、本年度の部員諸君のバックアップを感謝するとともに、来年度のリーダー宮崎敏孝にも、僕と同様いやそれ以上にバックアップをしてくださるようお願いしたい。

では、お世話になりました。

## 昭和39年度の部活動は発展期に導入した

池田直弥

今年度一年間を振り返って、少し大づかみな反

省点を挙げれば次のような点が頭に浮かんだ。

- ①伊那、松本が合同して3年目、連絡を密に行い、リーダー会の充実等により軌道に乗った年です。5年間の部生活で、年々部は発展の道を辿っていることがわかる。合同当時の1年生が3年生になり、部活動の中心になって始めて、胎動期から発展期を迎えたと思われる。
- ②大きな事故が無かったこと。安全登山の年。こうあるべきである。
- ③オール信大の集まりがあった。2～3年、この集まりを、苦しみを通じつつも持つことが大切である。信大山岳会は日本一になる可能性を含んでいる。
- ④OBとの繋がりが密になって来ていること。サマーテント、奥又白合宿の成果である。今後も続けるように。
- ⑤各合宿ごとの計画書は出ているが、報告書は一度も出なかったのは残念。報告書は出さなくても良いというムードを我が部からなくすべきと思う。山行は計画書に始まり、報告書で終わるのが本当ではないか。その様な習慣を付けることによって、確実に竹のように部も個人も成長するだろう。

⑥報告 No.2 の編集活動があった。今年度中にまともになかったのは残念。来年度中には出せるよう頑張ってください。

⑦1年生を甘やかした懸念が感じられます。ガッチリしごくことが部の発展の基礎。

今後、部は発展するだろう。一人ひとりがしっかりとした精神と技術を身に付けないと分散合宿は成立しないのだから、部にとっては危険性の多い合宿形式といえる。しかし、今年度はたいした事故も無く、この合宿形式をこなしたことは、部が充実している証拠ともなった。さて、今後はこの上に何を加えたらよいのだろうかと考えてみた。

「〇〇山のことはヤツに聞け!」「〇〇沢はヤツだ!」というような個々人が何かに精通した分野を持てたらなーと思われる。そしてそれが後輩に受け継がれていく。例えば、奥又白に関しては、小松OB - 小林喜芳OB - 山田OB - 小谷と受け継がれて来ている。そして、右岩稜、Dフェース、六峰の新ルート開拓がなった。過去において無意識的に行われてきたが、意識的に部活動に入れたら良いかもしれぬぞと思った次第。

## 昭和40(1965)年度 部活動総括

サブリーダー 故 小川 勝

40年度は宮崎敏孝をチーフに新谷、西阪、小川の3名がサブということで4年部員を中心にリーダー会が組まれた。この年の基本方針及び活動方針は以下のように決められた。

「まず、第一に“考える”こと(大学山岳部とは何なのか? 如何なる活動をすべきか? 社会的な意義はどうか? 遭難対策はどのようにすべきか? 登山の本質は? アルピニズムとは? 等々)をあらゆる部活動を通じて追求し、お互いにコミュニケーションを活発に行って、各自の考

えの範囲を広く持ち、理解を深めて積極的且つ能率的な活動をすることを目標としています。

また、部活動とは山行だけでなく、団体(サークル)としての山行以外の活動があり、それに山行それ自体と同様に取り組んで、社会人として学生としての自分を考えることも含めています。

山行面では38年度より取り入れられた少人数パーティによる部員各自の意欲的、良心的な計画に基づく山行を中心として年間計画を組みます。そのためには山岳部綱領に基づく技術指導要項を

成文化し上級生間の指導統一を計ることにしています。

1年生に対してはあらゆる範囲の山行が出来る事を目標として、そのための基礎技術と知識を修得してもらうように指導します。そして1年生を対象とした最低線の山行は以下のようなものです。

- ①5月 新人合宿(4/21 - 5/05) 雪上訓練、テントワーク(岳沢)
- ②6月 SAC山岳ゼミ(5/30 - 6/01) SAC問題(戸隠)
- ③夏休中 10日以上縦走 体力養成、テントワーク
- ④10月上旬 岩登り1週間(場所未定)
- ⑤秋(11月下旬~中旬) 雪上訓練(2 - 5日間) ラッセル、アイゼン訓練(乗鞍)
- ⑥冬休中 ラッセル中心の山行(15日間前後)(場所未定)
- ⑦春休中 アイゼン中心の山行(20日間前後)(場所未定)

以上の山行の他に、報告No.2の発行、部室問題の解決、来年度からの教養部統合に伴うSACの問題(1年生指導、遭難対策、海外登山etc.)、日本山岳会信濃支部、長野県山岳連盟との交流等々、「部」としての山行外活動を基本方針にそって行う予定で、既に活動が始まっております」(CL宮崎敏孝の5月発行OB会報への記事より)

以上のような年度当初の計画に対し、結果はどうであったかという、分散山行形式も3年目になり、上級生部員は各自が好きな山行を計画できる立場にあったにもかかわらず、活発な山行がされたとは言いがたい。それは個人山行の少なさや、春山合宿で計画が提案された2つのうちの奥大日尾根から剣岳、薬師岳というわが部にとっては初めての剣岳・立山山塊への合宿が潰れたことに顕われている。年代別の部員数は6年部員3名、5年部員5名、4年部員6名、3年部員2名、2年部員2名、1年部員14名という構成で、一番活

躍すべき3年部員、2年部員が少なく意欲的な山行が実行できなかった。

山行以外の部活動はどうであったかという、前年の長野山岳部の遭難の衝撃は大きく後を引き、また翌年から教養部が統合されて全学の1年生が松本に集まり、しかも松本在住の上級生が少ないという事実が迫ってくるという状況で、SACを実質的な組織にするとの活動に注力せざるを得なかったが、方向付けは出来たと思う。

- 1) 5月末、11月末と二度の山岳ゼミナールを全学の部員を集めて開催した。
- 2) サマーテントもこの年から全学で行うこととした。
- 3) 遭難対策の一つとしての資金集めのために映画会を長野、上田、松本、伊那の4地区で開催し、遭難対策基金の基礎を作ることが出来た。
- 4) 下部組織としてSAC海外登山研究会を発足させた。
- 5) SACの規約をかえて、3つの山岳部が共同で行うベースになるものを整えた。

その他の山行以外の部活動としては、県キャンパスのグランドの外側に部室を建てた。これは中古のプレハブで、当時の学部長であられた池田雄一郎先生にお願いして、国有地の中であるが移動可能であるという理由で許可をいただいた。この部室は部員の日常的な交流とトレーニングの基地として非常に有効であった。

出来なかったことの第一は報告No.2の発行である。第二は技術指導綱領の作成である。

最後に1年を終えてCL宮崎敏孝の反省を載せておこう。

「分散山行をするようになって、そろそろ4年である。分かれて行動できる為には何が必要かと言えるものを出すべきである。部員として最低どこまでの力をつけなければならないかのガイドラインが必要だ。1年、2年の部に対する意欲を持

つまでに到っていない人に対しては、上からの方向付けが必要ではないか。4年毎に部をあげて外へ出るというような山の目標を決めていく方がよい。」

この反省は次年度のCL新谷剛の「3年間の長期計画を立て、今年度は基礎技術を練磨したい」という方針へと受け継がれていく。

## 昭和42(1967)年度 部活動総括

リーダー 扇能 清

CL扇能清、佐藤俊彦、内藤精二、村田譲治の3名をSLとして、全員が3年部員のリーダー会で部の運営に当たることになり、教養部統合から2年目を迎え、新人は9名、SAC全体で15名の入部があった。

個人の行きたい山行を主眼に、自主性を尊重し、山行意欲を重視した分散山行形式とし、年間でオールラウンドな山行を目指した。

新人合宿、夏、秋、冬、春の年間山行で、オールラウンドな山行に必要な体力、技術の習得を計り、合宿にありがちな惰性的で義務的な気持ちを無くし、少人数で各自の存在が強く意識される、意欲的で充実した山行を行うとした。ただし、条件の最も厳しい冬山は全員の合宿とした。

一方、教養部が統合された新人の指導方法について、42年度も合同の新人合宿を行おうという申し合わせがあったが、その実施方法を巡って、年間方針の違いや新人合宿の在り方について、各部の意見の相違が表面化した。SAC委員会の度重なる話し合いで、新人は合同合宿とし、並行して2年部員以上の強化合宿を同時期、同場所で行うという変則的なものとなった。

それでも、新人合宿以降については、将来の統合を視野において、年間を通してSAC(信大山岳会)の新人として扱うということになった。

夏は、意欲的な計画も多く出され、日高、飯豊、北アルプス等の山行が行われ、一応の成果を見た。しかし、分散山行において当初心配された、なれあいとも思えることも見受けられ、反省点を残し

た。

秋は、中央、南で沢登りと岩登りの山行が行われたが、雨にたたられ計画通りの行動ができずに終わった。一方北アルプスの奥又白では、新谷剛、岡村知彦による奥又白第一尾根アルファルンゼ奥壁の信大ルートの開拓となった。

しかし、各部に分かれて夏山をこなした1年部員に、SACの新人として連帯感を養うとして、全新人が参加した長野山岳部の涸沢定着合宿が行われた。この合宿で、前穂高北尾根四峰甲南ルートでの墜落、麻ザイルの切断による遭難が起きた。

我が部においても、反省会が繰り返されたが、具体的な原因の追求には踏み込めずに、SACの組織や機構改革という問題を検討することに終わってしまった。

冬山合宿では、長野山岳部の山行自粛で新人を全員引受け、北葛尾根と七倉尾根から、新人主体の針ノ木岳アタック蓮華岳東尾根下山、上級生主体の鹿島槍ヶ岳までの縦走、東尾根下山を計画した。

この合宿では天候が悪く、全員で針ノ木岳のアタックは出来た。しかし、縦走隊は新人隊の下山をサポートした後、針ノ木峠で天候の回復を待たしたが、燃料食料が無くなり遅れて新人隊の後を下山することになった。

この合宿で2件のスリップ事故が起き、冬山の前にアイゼンワークを目的にした訓練山行の必要性が論じられた。秋の遭難で、一時は山行の自粛

も考えた中で、大事に至らなくて幸いであった。

春は、劔岳北方稜線の宇奈月から僧ヶ岳を経て劔岳本峰を計画したが、参加上級生の減少で、池ノ平山までとし赤谷尾根下山と計画を縮小して行った。

入山時の重荷と、北方稜線の予想以上の厳しさに苦勞し、サンナビキ山から毛勝山にかけてはフィクスの繰り返しであった。全員のがんばりで計画通りの山行を終えることが出来た。

個人の行きたい分散山行で、年間でオールラウンドな山行を方針としたのであるが、部としての基本線を満たす分散山行について、そして、その中に求めるオールラウンドな山行のために習得する技術やそのレベルについて、それらを具体的

に示せず、過去の山行による経験的なものの中で捉えていたため、少なからず誤解を与えることになった。

経験の少ない3年部員のチーフリーダーでは、提出される山行計画を検討するのも判断基準に困惑する状態であり、年間の山行においても前年度を踏襲した控えめな活動にならざるを得なかった。

そして、部にとって重要な積雪期を前にして健康診断で異常を指摘され、冬山、春山に参加できなくなり、サブリーダーをはじめ先輩や皆に迷惑をかけ、助けられてやっと1年を過ごすことができた。

## 昭和43（1968）年度 部活動総括

リーダー 小野田譲治

当年度伊那松本山岳部役員は、CL村田譲治、SL山下泰弘、武藤一郎の体制で、活動の基本方針は、新人合宿を昨年度同様オール信大で、他は基本路線の「オールラウンド山行が出来る」を目指した。実施に当たっては、個人個人の行ってみたい山の希望もそれぞれに強いことから、秋山までは分散山行の形態を主にして活動した。然しながら、一時多かった部員数も、時代を反映してか減少に転じ、12月の伊那での部会の参加者は、7年生部員1名、4年生2名、3年生4名、2年生4名、1年生2名という内容で、以前とは様変りの寂しいものになっていた。我々の入部当時は、新人合宿から夏山までは新人のふるい落としと考えられていたが、今後は指導体制をはっきりさせて大事に育て上げていかなければならなくなった。そんなことも含め、冬春は従前同様合宿による訓練を主にするものであった。また、ザイルをはじめ装備を更新したくても大学の体育会からの援助も少なく、自前で何とかせねばということで、伊那

市から中央アルプス伊那小屋への荷揚げを山岳部で請負い、皆で稼ぎ出した当時の38,000円は貴重なものでありました。

昭和43年度部活動をコメントするにあたり、ロマンチストはリアリズムに悩むなど勝手な理由をつけて計画書はあるものの、報告書はさっぱりのまったくやりっぱなしの役員であったと当時の面々に対し、また部の報告書作製に携わる方々に対し、深く反省しお詫び申し上げる次第であります。

当時のことを思い返すと、毎月々はリーダー会に始まって、部会（総会といていた）と、SAC委員会、更には海外登山企画委員会といろいろあって、又更に毎日は、酒を飲み交わすことに明け暮れて、まったく何してたんだとも思うが、改めて山岳部の活動は皆々にとっても、また、私にとっても後々の社会生活をする上に大変良い経験になったと思っています。内藤がかつて手紙の中で言っていた、「いつ思い返しても胸熱くなる輝

ける学生時代」の象徴であろうと思います。私本人は、山が好きというよりは、「山行きの活動を通じた人が好き」という訳で、自称山岳部中退ですが、卒業後も社会人山岳部や、仕事での山との

付き合いを通し、「山行きの人が好き」を続けることになりました。信州大学山岳会伊那松本山岳部は皆さんと共に永遠です。

## 昭和 44 (1969) 年度 部活動報告

リーダー 武藤一郎

当時、山岳会では OB と現役が協力して、アンナプルナ II 峰に向けての海外遠征準備に相当の熱意を傾注していた。その作業は、海外旅行自体がまだ一般化していなかったその時代において、資金集めから情報集めまで膨大なエネルギーを要した。これに先駆けること数年前から、既に信州大学からは小川勝、米倉幸夫等の 1 パーティーが、また西郡光昭が他の団体で数回遠征に参加していた。アンナプルナ II 峰遠征は、そうした先駆者たちによる海外経験を部に還元して、次なる海外山行を実現しようとする試みであり、先駆者たちの部に対する真摯な姿勢は頭の下がる思いがした。

しかし、部を運営する立場からすると、現役メンバーの間では海外に向けた労力、情熱の分だけ、部活動へは低減するのではないかとの危惧があった。もちろん海外遠征は国内山行との完全なトレードオフではなく、ある程度は両立するであろう。しかし、現実問題としては限られた時間と労力、それに下界よりも合宿に入った方が生活が安定するような脆弱な経済力も考え合わせれば、大方の現役にとってはどこかを削るより仕方がないだろう。このため山岳会全体としていかに海外遠征を目指すことによるマイナスの影響を低く抑え、同時に遠征を目標に技術的なレベルアップ等の意欲を促進するように振り向けていくかが一つの課題であった。

そして当時は、大学紛争の真っ只中。ノンポリであり、学生である前に部員の意識が強い連中

だ、だから紛争によって部の運営や部員の生活が影響を受けることはないだろうと考えていたが、やはり概ねその通りだった。ただし、意外にも大学改革に対して問題意識を抱く結構まともな部員が少数存在したことは喜ぶべきことであろう。

また、伊那松本、長野、上田の各山岳部の活動は、すでに信州大学山岳会として統合されたが、これをいかに、より効果効率的な組織運営にしていくか、特に新人教育、技術の統一化、遭難対策等は山岳会全体で考えていくべき主要課題であった。海外遠征計画についても、山岳会統合への組織改革の延長線上にあり、現役の部活と共に遠征の実行委員会の活動も、統合をより進める方向に大いに作用したと言える。

他方において、現役の山行については装備の改良や技術の発達に伴い、従来からの大規模な合宿方式から少人数による分散方式に移りつつあった。このため部としても比較的大きな合宿方式は新人合宿、夏の定着、冬山を中心と考えることにした。他の合宿については山行に参加するメンバー構成にもよるが、出来るだけ部員の意欲ある立案と行動力を生かした分散山行にする方針とした。

我々が入学した昭和 40 年頃の伊那松本山岳部においては、オールラウンド方式が我々の登り方として示されていた。即ち、縦走、定着、ポーラ（極地）等の方式は勿論のこと、山が尾根、沢、岩、氷雪といった諸要素によって成り立つからには、それらすべてが登攀の対象となる、あるいは

それらすべてを登攀できるようにするのが目標とされた。44年度についても、基本的には部としてこの方針に大きな変化は無かったが、当時折りに触れて考えていた自分なりの解釈を以下に加えたい。

それは、登山の楽しみ方はひとによってそれぞれ異なるだろうが、我々の多くにとっては根源的なところで自然と同化することではないかということである。山には尾根、沢、岩、氷雪、森林、這松、シラビソやナナカマドの藪と、多種多様な要素によって構成されており、我々が小屋はあってもテント生活を好むのは経済的な理由だけではなく、より身近に山を感じたいからであろう。狩猟を生業として東北の山々を駆けめぐるマタギの人々を見よ。彼等が如何に雪に強いのか、地形に強いのか、動物や植物や自然界の知識に通じているのかを観察すれば、本来「山に入る」という行為は、動物的感觉で自然の障害をモノともせず山中を

行動することではないか。

言い換えれば、カモシカのごとく岩を登り、氷雪を移動し、藪漕ぎをものともせず鋭敏な感覚でルートを見出して、夜は岩陰や尾根の小テラスで眠ることこそが我々山岳部の憧れるところではないのか。我々は困難で変化に富んだ山や登攀ルートを求めるが、それは言い換えれば通常ルートを登山するよりも、はるかに大きなリスクを抱えることを意味する。そうしたリスクをより小さくするために、我々は体力を養い、技術を磨き、経験を積み、困難に押し潰されない気概や気力を身に付けようとしているのであるまいか。海外遠征準備の一方で、我々は信州の山、日本の山における信大としての登り方をまだ模索していたと思う。海外が近くなっても、やはり、それが我々にとっては原点であり続けるとの切なる思いを抱いていたのではないかと想うのである。

## 昭和 45 (1970) 年度 部活動報告

年度最後のリーダー 井関芳郎

昭和 45 年度は CL 笠原敬一 (4 年)、SL 市野和雄 (3 年) で出発した。リーダー会は他に井関芳郎 (4 年 : SAC 委員長) を加えて 3 名の構成で出発した。

年間の方針として、部員相互の親睦を深め、オールラウンドな山行を通じて、登山技術の向上、リーダーシップ、メンバーシップの養成をし、また新人をより良く指導する。そのため年 3 回の合宿、個人山行を行う。また、そのような個人山行がより良く、安全に行える為に新人を指導し、上級生も心がけて行くこととした。

本年度の運営の上で前年と大きく変わったのは、合宿を年 3 回 (新人、夏山の定着、冬山) としたことである。他の山行は個人山行として各自の自主性に重きをおいた計画にもとづいた山行を

行おうと試みたものであった。

これは前年度まで、合宿が多く、上級部員の間には各個人が行きたい山、計画した山行が思うように出来ないという上級部員の不満が根底にあり、やる気をそぐ結果となっていたのではないかという反省から、合宿は最低限 3 回 (新人、夏山岩場定着、冬山) とした。

新人合宿は信州大学山岳会として伊那松本、長野、上田、女子山岳部合同で横尾にベースを置き穂高・槍周辺で雪上訓練と登攀を行った。CL は山岳会委員長の井関芳郎、SL は笠原敬一が務め、連日の好天に恵まれて成果をあげることが出来た。

夏山は個人山行として 9 件の南、北、中央アルプスの縦走を行った。



夏山定着合宿は昨年度まで長い間続いてきた前穂高岳奥又白を劔岳に山塊を変えてCL笠原敬一、SL市野和雄で他に4年生1名、2年生6名、新人12名が参加した。

夏山を終えた9月中旬、CLの笠原敬一が交通事故に遭遇し、2ヶ月間の入院となり、退院後も療養のため、CLを佐藤正敏に交代した。佐藤は翌年の2月にはアンナプルナⅡ峰遠征隊の先発隊として出発することになっており、冬山合宿までを務めた。

冬山合宿は穂高岳周辺でCL佐藤正敏、SL市野和雄で行った。

冬山合宿後佐藤、市野はアンナプルナⅡ峰遠征隊の先発隊として出発することになっており、冬山合宿後、再度CLを井関に交代した。SLも不在となり、一人しかいない3年部員がいなくなったため、2年部員を新たに加えてリーダー会を構成し、また5、6年部員もヒマラヤ遠征参加のため上級生部員が極端に不足している状況の中で春山を迎えることとなった。

春山山行はこのような極端な上級生部員不足の

中で2件の山行を計画し実行した。

4年生1名、2年生4名、新人10名で計画し、①南アルプス白根三山縦走、CL井関芳郎、SL大安徽雄以下2年生1名、新人5名の編成で北沢より白根三山を縦走、転付峠より下山、②立山スキー山行はCL小根田一郎、SL三坂健次と2年生2名、新人5名の編成で立山室堂をBCとしてスキー訓練とスキーを使って雄山、別山等へ登頂し、両隊とも無事に山行を終了し、45年度の活動を終えることが出来た。

このように、1年のなかで交通事故、初めてのヒマラヤ遠征と普通では想定できない事態が重なり、チーフリーダーが3回替わることとなり、当時の部員諸氏には多くの戸惑いと迷惑をかけたことと思いますが、多くの新人を抱え上級部員の極端な不足という事態のなかで、年間の目的を達成し、大きな遭難事故を起こすこともなく次年度に引き継ぐことが出来たのは当時の2年生部員が優秀であったことと、すべての部員の情熱に支えられてきたからであったと、遠く過ぎ去った昔を振り返ってみて改めて想い、感謝する次第です。

## 昭和46(1971)年度 部活動報告

リーダー 三坂健次(現：三坂岳応)

この年はSACが長年構想を温めて来たヒマラヤ遠征の夢が、アンナプルナⅡ峰遠征という形で実現された記念すべき年だった。その隊員の内、信大伊那・松本山岳部(SIMAC)在生として扇能(7)・佐藤(5)・市野(4)が参加した影響で、この年は、本来SIMACチーフを務めるはずの4年生の代わりに、3年生が中心になって部を運営するという変則的な事態になった。

チーフに任ぜられたものの、大学に来て初めて山に登り始めた私にとっては、落ちこぼれないよう必死でついて行くのがやっとの2年間を経験しただけ。部をまとめて行くのは重荷であったが、

他の3年生もリーダーとして対等に運営に加わってくれる事で、何とか引き受ける事になった。

その1年が始まり新人合宿を控えた5月半ば(その日はちょうど私の誕生日だった)、ちょうど伊那の私のアパートでリーダー会を開こうとしていたところへ「佐藤さん遭難」の知らせが届いた。詳細はわからないものの、既に10日も前の事故で、運が良ければ助かるかもしれないというようなものではないらしく、一同、山やリーダー会どころでない沈痛な気分陥ってしまった。私の同期や1年下の2年生にとって、山ではもちろん、松本での生活においても佐藤さんは実に頼もしい

見貴として大きな存在だったのだから。

人によって違っただろうけど、私の場合はその後かなり長い間この落胆から立ち直れなかった。とは言え、現に新人は入部していて、当面差し迫った新人合宿をどうするか。各学年ともそれなりにステップアップして行かなければ意味が無い。停滞する事に何の意義も見出せず前進あるのみ等々、いろいろ意見はあったが、部の活動は慎重論を基底にしながらも何とか例年通り進んで行った。

しかし何と言っても落ち込んでいる自分自身の気を奮い立たせるのは容易ではない。登っていても気はそぞろ、足が地に着いていないような気持ちが付きまとった。ちょっと微妙な所に差しかかると考え込んでしまい手足が出ない事もたびたび。それでも半年ほど過ぎた秋頃には何とか元に戻りかけて来たように思われた。

そんな晩秋のある日、急にひどい腰痛が起き、居ても立っても寝ても痛く、ついには歩くにも難儀するほどになって、さすがに病院へ。椎間板ヘルニアと診断を受け、取り敢えず腰椎麻酔で痛みを抑え、後は自宅（金沢）で療養するよう指導を受け帰省。手術という程でもなかったが、リハビリに専念して普通に歩けるようになるのに半年かかってしまい、部のリーダーとしての責任どころか、一部員として担うべき事すら全うできないままこの1年が過ぎてしまった。

その間、部の方は、ヒマラヤから帰国した市野を中心に冬山合宿で白山を計画したものの、ちょうどこの年は長野県山岳協会関連の遭難も重なり、登山自粛論さえ起きていたその煽りを受け、冬山合宿は中止。代わりに妙高あたりで冬山訓練山行を実施。

このような訳で、リーダーとは言っても、前半は気力伴わず、後半は自らの故障で、個人的にはほとんど停滞の年になってしまった。又、リーダー会として慎重なあまり、提出された計画に関してかなり抑制的になっただろうことは、他の部員にとって甚だ不本意だったかもしれない。しか

し、それは一度立ち止まって登山の原点を考えてみる、またと無い機会になったはずだし、その後、後続の人達が創造的な計画を立案実行して行く下地になったとも思える。どんな逆境にあっても、不遇を託つだけでは何も生まれない。成長の糧とできる者こそ幸いなのではないか。

## 部活総括

大安徹雄

佐藤・市野のアンナブルナII峰遠征隊への参加による上級生不足で、3年部員4名を中心としたリーダー会でスタートした。

昨年度より取り入れられた個人山行形式が良い意味でも悪い意味でも大きく発展し、一つの新しい局面を開いた年度であったと言える。アンナブルナII峰遠征隊への現役参加ということもあってリーダー会は3年部員4名で構成され、基本方針として、新人合宿、夏山岩場定着合宿、冬山合宿の年3回の合宿と併せ、各人の技術、好みに応じた個人山行を行うという方向を打ち出した。部全体の総合力をぶつけて、ある地域、方法等を追求しようという雰囲気は、レベル的な面、それ以上に、部員間にも、そのような風潮は、下火であり、個人あるいは部内の少数グループで、ある目的をもって山行を行うという傾向に変わって行きつつあった。逆に言えば、それだけ、部全体を強い力で引っ張っていこうとするだけのものがリーダー会になかったとも言える。そんな中で、我々は、常に、合宿と個人山行の関係、位置付けを議論し合い考えあった。個人山行形式により生ずる様々な問題、合宿が義務的になること、新人の指導がおろそかになること、個人の山の登り方が偏ったものになってしまうこと、個人間の技術に差が生じ、それが合宿にも影響すること等、そんなことを部員間で、個人で、真剣に考え合った。到底結論の出ることではなく、矛盾を感じながら、それでも山に登っていた者もいるし、ある程度、自分で結論を出した者もいた。そして、何人かは部を

去っていった。しかし、年間を通して40に近い山行がなされ、北ア、南ア、北海道、東北へと日本の山々に我々の足跡を印した。考えることも大切である。しかし、考えるだけでは何にもならない。がむしゃらに行動し、その中で何かを見出そうと、各自、精力的に動き回ったと思う。

新しいリーダー会がスタートし、5月連休山行を目前にしていたおり、アンナプルナⅡ峰で佐藤さんの遭難があった。筆舌に尽くしがたい悲しいことではあったが、この遭難が我々に教示してくれたものは大きかった。遭難対策の面では積立金の強化、装備の集中的点検、連絡網の強化、遭難対策ゼミの充実等と新しい方向を見出した。又、各部とも、上級生不足が深刻化しており、そういう意味でも各部間の交流は活発で、各部合同で多くの個人山行がなされ、遭難対策に関しても、お互いの山行計画のチェック等、連絡が密になされるようになった。

新人合宿は例年通り涸沢でSAC全体で行われ、16名の新人が希望と不安に包まれて参加した。あいにく天候が悪く、十分な成果を揚げ得なかったが、夏山までにも上級生の間で新人を加えた山行がなされ、夏山にそなえた。夏山は、沢登り、岩登り、縦走へと、各人の目的、好みの下に個人山行がなされ、岩場定着合宿は今年の剣岳から前穂高岳東面に場所が移された。今回も、雨にたたられたこと、前述したように合宿が義務的になさねだしていたこともあってか、満足のいくものではなかった。

秋は、再び、ネパールから戻った市野の復帰などもあって、活発な登山活動がなされた。例年のことながら、冬山の場所をめぐる種々の議論が戦わされ、決定も遅れるのであるが、今年は、昨年の穂高が雪が少なく、又、都会化されて、真の部の力を発揮する場所ではもはやないという意見が多く、雪が深くて、我々の力だけでやり遂げられる場所ということで、白山が選ばれ、別山東尾根よりセミポーター形式で本峰を攻めるという計画が立てられ、2回の偵察をやり、着々と準備が進められていた。

しかし、間際になり、長野県山岳協会より、ヒマラヤで事故を起こした山岳会の今季の冬山中止と、県下よりの遠征隊の遭難が多発したため冬山を自粛する旨の通知があった。我々は、再三にわたり話し合った結果、これに従うことにした。そして、白山の冬山は中止され、代わりに、妙高山で遭難対策ゼミを兼ねた冬山訓練合宿が行われた。我々は、この場で、さらに遭難に対する意識の向上を図り、学んだのであった。

そして、3月の声を聞くとともに、知床、飯豊、後立へと我々は羽ばたいた。今年度最後の山行、総決算である。雪深い飯豊、さい果ての地知床、岩と雪の後立で思う存分動き回り、考え、語り合い、それぞれ何ものかを得て戻ってきた。不慣れなリーダー会内部に、存在した種々の問題、悲しかった佐藤さんの遭難等、そんなものが完全に解決されたわけではなく、区切りもつかなかったけど、フィナーレは盛大であった。

## 昭和47(1972)年度 思い出

リーダー 小根田一郎

昭和44年4月、入部したてだった。ううっ、ぐるぐる回る！ここはどこだあー！？と一晩中もんもんとして朝を迎えた。隣に4年生山下さんが寝ており、伊那の誰かの下宿でごろ寝だっ

た。その朝から、同じく4年生の米倉さんに連れられて1泊2日予定で甲斐駒ヶ岳に向かった。松本の部室で「誰か行くか？」の誘いに手を挙げたのだ。前日に松本で食料等を買って伊那へ行

くと、4年生の武藤さんが迎えてくれ、飲み屋へ連れて行ってくれたのだった。現役入学したてで「飲む」ことも分からないのに、歓待を受け、飲んでしまった報いだ。伊那」とそこにいる上級生達について強烈な印象として焼き付いた。

1年生の夏山。いくつかの選択肢から3年生佐藤さんリーダーの北海道日高南部を希望した。他に3年生井関さん、同じ1年生の鳥越君との4人パーティーだ。日高南部のその又南部は稜線上に道はなく、手前のピークから沢を下り、下の出会いから別の沢を登って次のピークへと地下足袋・わらじで移動するのが主体だった。タンパク質は現地調達（岩魚）、持参は米と調味料主体、フライシートのみという山行で好みに合うものだった。入山口の荻伏で佐藤さんが大量に仕入れてきたわらじは立派なもので佐藤さんも得意顔だった。途中の沢のなかでは流木溜まりの規模が大きく、そこで一部屋分くらいのたき火もした。沢を詰めて崖を上がると、どのようにしても踏まずには前へ進めない程密集した広いお花畑もあった。このような経験はこれが最初で最後だった。殆ど最後の行程で八の沢カールにやっと辿り着き天国だ！ と駆け下った。が、夜半から風雨となりフライシートの下で寝ていてもびしょ濡れなので、外の草地で雨の中寝ていた。年月は寒い・冷たいの記憶を消去して、外で雨に打たれながら寝ていた、あの心地良さだけを思い出として残している。

おそらくは心配してだろう、佐藤さんが様子



●ワラジを仕入れてきた佐藤さん

を見に来るまで気持ち良く寝ては時々醒める程度で、誰もいないカール底で地面と同化したみたいになっていた。その後、この雨で鳥越君の具合が悪くなり、八の沢カール下流域での岩魚釣りはできず、恨めしく横目で眺めるしかなかった。この日高の山行は「体に染み込むような山行」だった。

1年生の冬山。明神岳だった。五峰獨標で東南綾・西南綾からの両パーティが合流し猛烈な風のなか、テントを設営しようとした。まず無理だと感じた。が、その時の上級生の行動には目を見張った。その翌日、明神三峰にBCを設営。その夜中、初めてナイロン袋とゴムバンドを用いシュラフの中で自前の熱源で湯たんぽを作った。その温かいこと。もちろん翌朝は分からないように急斜面の雪面シュートに放棄だが。小キジの話題では、既に35年以上経過した訳だが、告白する。あのときテントの横に小キジを打ったのは私だった。当時、皆に向けて「名乗り出よ」とリーダーの武藤さんが言われたのに対し、どうしても一言目が出なかった。おそらくはバレていたであろう。

1年生の春山。新潟の八海山（魚沼三山）。3年生佐藤さんがリーダーで、5年生扇能さん、3年生笠原さん、1年生三坂君、1年生森君、そして私だ。稜線上で、吹雪の中、雪洞を掘って逃げ込んだ。天候が崩れると猛烈な豪雪地帯だ。そのため入口内側を深く深く掘っておいた。夜中にふと気配で目を覚ますと、同じ1年生の三坂君が完全武装で入口付近の雪を内側の穴に除雪して横穴を掘っている。マッチを擦るとシュー、ポッと消える。入口が雪で分厚く塞がれて酸欠状態だった。三坂君は実家の金沢で小さい頃の豪雪を体験し、注意していたのだった。夜中にシュラフから出て靴を履き完全武装して除雪に行こうとする「ズク」は並大抵ではない。感心を通り越して尊敬に値するものだった。

2年生の5月連休。福田君、大安君、鳥越君、そして私の2年生同士4人で唐松から檜までの長駆だ。楽しかった。しかし、あの靈気漂う北葛・船窪あたりで尋常ではない不吉さを感じ、降りて



●今は無き横尾の岩小屋にて 信大 RCC 星野氏・草野氏

しまった。が、同じ学年同士での楽しい山行だった。

2年生の夏縦走も終わり、次は劔岳定着の岩合宿だ。その最終の下山日、団装分担のみ免除してもらい残っている食料を分けてもらい、同じ2年生の福田君と二人で、下山する本隊と分かれて別行動をとった。劔沢の真砂出合いのBCから上高地サマテンまで早駆けだ。初日こそ五色ヶ原まででゆっくりとツェルトを被ったが、あと二日間の上高地に到達。切れていたタバコを太郎の小屋で手にいれ、2本いっぺんのまとめ吸い。さすがに夕方の黒部五郎カールでそろそろ泊まるかと弱音を吐いたが、福田君は平然としたものだった。あの頃は強くて、自由なペースで早駆けすることが楽しくてしょうがなかった。翌夕方、着いた上高地のサマテンではただ飯食いはならんと早速こき使われ、こんなことなら徳本越えで松本に降りた方がよかったなあと。今では想像もつかないほど元気だった。

2年生秋。山岳部を退部した上級生が信大 RCC なる先鋭的なグループを作っていた。岩登りの実力は山岳部より上だった。伊那の猿岩で人工登攀を教えてもらい、屏風岩に誘われたが、当時のリーダー会の学年毎の許可基準に基づけば、希望ルートは当然に不許可となる。当時は2年生の岩の許可ルートとして屏風岩の殆どは対象外だった。しかし、行った。退部してもよいと考えていた。後日、4年生佐藤さんに拾ってもらった。公表しないこと、後々のリーダー会活動に役立てると。

おかげで山岳会 OB としての今の私がある。このときは、人工登攀を使わずに当時のビブラム底での限界のフリクションでいく下部岸壁での血沸き肉踊る高揚感、東陵で終了点まで1時間半の楽しい駆け上がりなど、山岳部での岩登りでは味わえないものを味わった。

2年生の春山。立山の室堂 BC で山スキーだった。2年生の三坂君と私、1年生の小泉君、金野君、高橋君、中田君、板東君という2年生と1年生だけのパーティーだった。美女平からの入山時、2年生ですら荷物は40kgを超え、1年生は50kgを超えていたが、とにかく2日で室堂入りしてベースを張った。スキーの訓練又は山スキーの実践とはほど遠いものではあったし、登りはともかく下りは楽な筈のスキーが下りも又地獄となった板東君もいたが、スキー初心者が殆どのなかでよく行ってこれたと思う。

3年生の5月連休。2年生の三井君・臼井君との3人で雪洞・ツェルト利用で後立山に行った。何日目かに不帰三峰 A 尾根に最末端から取り付いた。上に抜ける頃には吹雪となり視界が利かず、唐松小屋前のツェルトまでの帰るルートが分からなくなり、幸いにも使用済みの雪洞を見つけビバークとなった。時間はいくらかもある。非常用のエスビット（だったか？）で作った水を回しのみながら3人で色々しゃべった。懐かしい思い出だ。

3年生の春山。急遽、4年生市野さんの代役でリーダーとして参加することになった鹿島槍天狗尾根から唐松まで。東尾根第2岩峰での社会人パーティーの事故者を2年生川口君と2人で行って夜中に西俣まで下ろした。夜中の雪崩痕の滑り面上のつるつる氷の上を、エアマットとシュラフ利用の簡易スノーボードで降ろすのは事故者の体重を支える方が勝る程だが、下まで下ろした後のデブリの上を今度は担いでいくのは厳しかった。朝が明けるまでに社会人持参の食料を食べた。乾燥食品やドライフルーツ等々。目を見張る高級品！翌朝、皆の待つテントのある荒沢の頭まで



● 鹿島槍天狗尾根～八方尾根下山  
高橋、三井、北岡、鈴木、西部（後）、川口（前）  
撮影：小根田

戻る際にそのドライフルーツ等々をもらったのがうれしくて…。その西俣からの帰りは時間との勝負なので、途中の支綾から東尾根に取り付いたが、結構しょっぱくて、川口君と2人で初登とちゃうかなどと、これまた楽しく登り直した。ところが、翌日、その川口君が鹿島北峰からキレットへの下りでアイゼンのツアッケを引っ掛けて滑落し、かなり下の親指程度の太さの1本の這松で奇跡的に止まった。全くスローモーションの如くで、その滑落を見ている数瞬の間に様々な思いが頭のなかで交錯した。川口君は九死に一生だった。

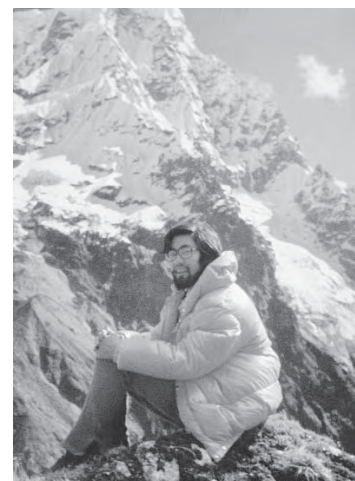
4年生冬山偵察。3年生高橋君と2人で、北鎌尾根を抜けて本隊が登る予定の赤沢山南東尾根を降りた。北鎌尾根に取り付くまでは冷たい雨に濡れたが、何だ北鎌尾根ってこんなものなのかという感じで肩の冬季小屋に抜けた。南東尾根を降りたところでツェルトを被って寝た翌朝、飯を食った後も例によってぐずぐずしていたら、業を煮やした雄治君に見放されてしまったが、千天出合いで雨のなか流木集めて小屋掛けしたりというように偵察というよりは雄治君と2人で楽しい山行をした。本番の冬山では、北鎌尾根を相前後して登っていた他大学パーティーの一人が槍の穂先から槍沢に転落して亡くなった。我々より数日後の悪天の日に槍を越えてきたのだった。槍の肩での沈殿日に北穂隊と無線交信しようとして外に出たら、落ちたメンバーの死亡を確認して肩に登り直してき



● 冬山偵察 撮影：高橋

た人間と出くわした。一挙手一投足のわずかな差でスリップ等を招く。その分かれ目は何だろう。

その後も部歴学年を積み重ねた三坂君と、大学院に入った私とは、二人でネパールに入った。冬の北方稜線を終えた川口君と三井君のチームも、ほぼ同時期にネパールに入った。三坂・小根田チームはジュガール・ヒマールのプルビチャチュー山域へ入り、川口・三井チームはロールワリンへと入った。我々の方は、禁止域ではあるが、少なくとも反対側のチベットを覗き込める稜線までと目論んだが、叶わなかった。その後、ネパールからヨーロッパに流れた後、再びネパールに戻って、今度は気楽にエベレストBCを往復した。当時、少なくとも私たちの学年は大学山岳部という大組織による海外登山に対し、すっかり嫌気をさしていた頃であり、やるなら少人数でひっそりと考え



● プルビチャチュー峰の対岸にて

ていた。その可能性を身近なものに感じた。ともあれ、この外の世界での体験はその後に山以外で大きな影響を与えた。

最後に、大学院の修了前に冬の黄連谷に行った。6年生か7年生かになっていた、同じ年に学部卒業予定だった川口君、高橋君、渡部君との気の合った4人で「卒業山行だ!」と称して。高橋君だけが氷に突き刺さるアイスハンマーとこれ又突き刺す用途のピッケルとをちゃっかり持参、他はピッケルといっても当時はそれが普通だった氷を砕く用途のやつで対処した。アイゼンだけは約1名を除き鋭く研いでいった。その1名は下流域

のツルツル氷の平面ですってんころり、をしていた。昔ならそれみたことかと怒鳴り散らすところだが、既に最上級生を通り越している。これも、個性に基づく愛嬌の範囲、自己責任での本人対処だ。最後の方の何とか滝だけ、トップの雄治君から例のアイスハンマーをロープで順繰りに下ろしてもらい皆で使用した。同時に登っていた社会人の氷用の装備を見て、皆であーでなくっちゃなあと感心。各人、個性を發揮した登り方をした。

懐かしい思い出の山行は尽きることがない。それらの楽しいとか・懐かしいとかの源は全て先輩、後輩の別を問わず良い仲間と登ったからだ。

## 昭和47(1972)年度 活動報告

サブリーダー 大安徹雄

個人山行形式も3年目を迎え、この形式に慣れるとともに、部員の間でも個人山行の意図するものが理解でき、さらに良き方向へ持っていかうとする努力が見られた。リーダー会も、昨年の不慣れから脱却し、新たに3年部員も加え、部の中核として本来の機能を果たせるようになった。各部会・総会においても、又、他の機会においても、活発に登山論、アルピニズム、大学山岳部等について議論が戦わされ、一つの組織としても生き生きとした1年であった。

基本方針は、「一定の技術レベルの習得、部員相互間の親睦、新人の指導の場として年4回の合宿を持つ。4回の合宿とは、新人合宿、岩場定着合宿、プレ冬山合宿、冬山合宿をさす。又、この内、冬山合宿とは上記の目的他に各人の力を發揮する部の山行とする。その他は、各部員の希望を活かした山行、レベルアップのための山行、又、合宿での不足点補充の山行の場として個人山行を行う。但し、1、2年部員は、各個人でオールラウンドという点や、各人の合宿での不足点補充のために、リーダー会より、各人の個人山行に注文

を付けたり、その目的のための山行をすることができる。」と成文化された。

昨年度と大きく異なる点は、個人山行に対し、従来ならリーダー会は許可する、許可しない位であったのを、各個人山行を企画したリーダーとの話し合いで、ここをこのように改めてはどうか、などを話し合い、リーダーはさらにその個人山行のメンバーに持ち帰って話し合う、という方法を採ったことであり、さらに、昨年度、合宿で不足の見られる部員、技術面で劣ったり、偏りすぎる山行しかしない部員がいたりしたため、リーダー会で、リーダー会メンバーまたは他の上級部員に委託してパーティーを組織し、半ば強制的にそのような不足や偏りをなくす山行を行わせられるようにしたことである。これは、人員的、期日的、場所的にも、かなり面倒なことではあったが、ある程度の成果を収めたし、部員も協力して行われた。それだけ、チームワークが出来上がっていた、とも言える。

新人合宿は、上級生不足で上田山岳部の参加はなかったが、長野山岳部と合同で行われ、第1の

目的の新人の指導は十分に行われたが、上級生の間の馴れ合い的なムードは解消できず、上級生としてはマンネリ的な合宿に終わった。昨年度あたりより、この上級生間の馴れ合い的なムード、合宿が義務的になることは、ずっと尾を引いており、新人の指導と各自のレベルアップという相反するもののディレンマを解決するまでには至らなかった。それが合宿以外の山行に大きく反映していくことになるのだが、やはり大学山岳部という限られた枠の中で、新人の指導もし、自分の技術をも向上させるということは、並大抵のことではない。しかし、たいていの上級生は、そういう矛盾も感じながらも、夏山前、夏山、秋山へとかけて、自分の技術を磨きつつ新人と共に多くの山に、沢に、岩に、足跡を残した。まさに、個人山行の花盛りと言えるであろう。

夏山岩場定着合宿は、部員の趣向が劔岳に向けられていること、穂高岳では十分に動けないということもあって、劔岳で行われた。従来は、真砂沢出合いをBCとして東面のみであったが、今回はチンネ、さらに西面へも足を延ばす計画であった。結果的には、東面が主体で、チンネに2パーティー、劔尾根に1パーティー出せたのみであった。問題は登った本数やルートではなく、上級生の技術的な面、下級生の雪上・岩綾歩きなどの向上であり、ある程度の成果は得られた。

冬山合宿は、例年になく早くより準備が進められた。当初、槍ヶ岳集中ということで、北鎌尾根、南岳西尾根、赤沢山東南尾根の3尾根より槍ヶ岳へ集中し、西鎌・中崎尾根より下山というもので

あり、SAC全体でという考えもあったが、上級生不足が大きな原因となり、種々修正された。そして、慎重に検討された結果、最終的には、北鎌尾根・赤沢山東南尾根より槍ヶ岳にて合流、1隊が北穂高岳まで足を延ばし、その後、西鎌・中崎尾根より下山と決定した。ルートの偵察が行われ、荷上げは、槍の肩の小屋と、赤沢山東南尾根取り付きにそれぞれ3日分がデポされた。例年の混雑を予想して、入山日を早めたため、全ルート、完全に独力でやれた。天候も冬山として普通であり、吹雪にもしごかれ、久しぶりに充実した冬山であったと言える。他パーティーのフィックスやトレースを使わざるを得なくなる程混雑して面白味の半減する穂高近辺でも、ルートの選び方と、期日を選ぶことによって、部の力を発揮できる場所となり得るといい教訓であった。

例年、春山は、最も活気を呈する時期であるが、今年度も、最後の山行にふさわしく、各部員の趣向、技術が活かされた内容豊富なものであった。又、長野山岳部とメンバーを分け合って、合同で行ったという点が注目される。スキーを使った山行も白山、黒部、白馬北方で試みられ、大きな成果をあげた。劔岳北方稜線も昨年あたりから見られた劔岳地域の集中の一環として大きな位置を占める山行であった。

春山というのは、大学を去る者、残って新しい年を迎える者、双方にとって、徐々に春の訪れを感じさせてくれる自然の中で、一種のドラマを作り上げてくれる。これこそ、山に登る者にしか分からない面白味であろう。

## 昭和50(1975)年度 活動報告

リーダー 吉田秀樹

高校生のころからの37年間の山登り人生の中で、30年前のこの1年を振り返って見ると一瞬であったようにも思えますが、少なくとも信州大

学山岳会にいた4年生までの4年間は山登りの基礎を身に付けるうえで特別な時代であったように思われます。何も知らない新人が冬の穂高の稜線



で30キロのキスリングを担いで歩けるようになるという当時言われていた会の方針（一部の人だけだったかは定かでないが）。このような指導システムは素晴らしいと思うが、組織に馴染めず山は好きだけどもやめていった者も多かった。残った者も部の方針と自分の志向との折り合いに悩みながらの山岳会の活動だった。大学生活の中の4年間で区切りをつけなければならないと言う制約は社会人山岳会にはない息苦しさを生じさせ、会の包容力のなさにも繋がっていく危険があると思う。

今年度の大きな出来事として、新人だった清川雅夫君の厩所の立岩での岩登りの練習中に起きた墜落事故がある。死亡事故ではなかったが記録の上からは忘れ去られようとしているが、結局大学に戻ることができず、山岳会の歴史の中でも重大な事故だったと思う。詳細はホームページの中で当時の仮報告書を見ることができる。この中でも言っているように新人指導と個人の志向、特に岩登り志向との兼ね合いがいかにか微妙で危なっかしいものか思い知らされた事故だった。この秋の事故で一時は冬山合宿の自粛も話し合われた。

今年度は特筆するような山行はなかったが数年来（私の入学する前から）劔岳周辺で行っていた夏の岩場定着合宿を奥又白谷周辺で行った。地

元の山と言う雰囲気奥又白の岩場をじっくりと登ってみたいと思ったからだ。普段行けないところもトレースすることが出来て私としては今でも良かったと思えるのだが、スプーンカットされたカチカチの雪渓は雪上訓練にはあまり快適とは言えず、その後はずっと劔岳へ戻ったようだ。新人合宿の時もそうだったが、この合宿でもなるべく岩のルートを登るようにした。渡部さん、福島、古橋にはずいぶん批判された。既成のルートを登るのがそんなに意味があるのか、好き嫌いにかかわらず皆登らせるのが良いものかどうかと。今となっては彼らの言い分の方が正しかったのかもしれないと思えるのだが……。それまで伊那松本山岳部と岩登り志向の長野上田山岳部とにあった部の方針の違いがこのころからはっきりしなくなってきたように思われる。この時は久しぶりの奥又白合宿と言うことでOBの人が何人か途中参加されたが、歓迎するという余裕が私になく、ヘッドランプを点けてA沢を降りてくるOBを迎えにも行かず、又いっしょに登る機会も作れなかったことを今更ながら深くお詫びしたいと思います。いつか山で罪滅ぼしが出来ればと思っています。

一瞬と思われる時間にもここに書けなかったことも含めていろいろ思い出されました。

## 昭和52（1977）年度 リーダー雑感

リーダー 師田信人

1977年度の山行概要については、「昭和48年から53年まで」及び「巖冬季黒部横断」の項でたびたび触れた。黒部の記録もなんとか纏めることができ（というより纏めてもらえた、と言うべきだろう）、生前の二俣勇司との約束がやっと果たせた。

現役の頃は今日の前にある山のことと、里に下りてからは次なる山行計画を立てることだけで時

間が過ぎていった。リーダー部員になった時も、北アルプスの麓の大学だから都会の連中だけには負けたくない、と思うことはあっても伝統を意識することはなかった。それが、大学卒業して25年、社会や組織の中心として働く身になって、何かあった時に歯を食いしばる力のもと結局山岳部時代のことにいきついでしまう。とりわけ学生時代最後の山行になった黒部丸山東壁緑ルートの

登攀や明神東稜での滑落事故は、ことあるごとに甦ってくる。あの時のことを思えば、ということになるわけだが、それだけ自分の人生に影響を受けていたということになるのだろう。という次第で、ここでは山岳部に対する個人的雑感を綴ってみる。

信州大学山岳会の名前を初めて知ったのは、高校時代にアンナプルナⅡ峰遠征の写真を「岳人」か「山と溪谷」で目にしたときが初めてだと思う。なにかの記事で、山岳部の方針として個人山行を重視し、しごきとは関係ない山岳部、というのを読んで漠然と憧れを持ったのを覚えている。大学に入ったのか山岳部に入ったのかわからないような学生時代7年を過ごして、いろいろ思うことはあったが基本的には上記特徴に間違いはなかったと思っている。当時社会的にも問題になる事があったしごきは、言葉の上で戯れに使うことはあっても、現実には新人合宿では2年目が最も担ぎ、冬合宿でも危険な部位では上級生がリスクを取るの当然と思われていた。個人山行は各人の能力・志向に応じて行なうものであり、平地でのトレーニングも含め基本は自己管理と自己責任、山行で結果を出せれば誰からも揶揄されることはなかった。困難な場面・危険な箇所では上級生が先頭にたつ、いわゆる“指揮官先頭”の精神は誰が言うでもなく上級生の背中を見て自然に学ぶともなく身についた習性になっていたと思う。山岳部という集団の中にいた時は気づかなかったが、社会人となってこのことの重要性を痛いほど実感している。これが伊那松本山岳部だけでなく、信大山岳会の、創設期から脈々と受け継がれて、培われてきた伝統という力なのだと思う。

大学山岳部は社会人山岳部と異なり原則として

4年ですべてのメンバーが入れ替わる。信大では4年で山岳部から足を洗うと白い眼で見られてきたが、短期間で構成員が入れ替わり、代表者が毎年変わる宿命からは逃げられない。年度毎のリーダー会員の数・力量により目指す山行は異なれ、短期に集中して登攀経験を身につけ次世代を育てなければいけない。技術的な指導だけなら、個人のセンスの差はともかく、難しくはないかもしれない。上級生から言葉として教えられたわけでもないのに、同じように振る舞えるようになると山岳会の一員としての自覚も生まれ、また上級生部員としては“信頼できる”下級生が育ってきたと感じるようになるのではないだろうか。学生時代は無意識に振る舞い無意識に感じていただけだが、多少なりと社会の荒波に揉まれた今、ちょっと小難しく“信大山岳会の（山登りの、でなく精神的な）伝統”を理論づけてみると、こんなところになるのではないかと思う。

夢を持ち、夢を見て、それを実現するために努力して、いつか夢を現実のものとする。いわば“成功体験”というべきものを、若い日に山を通して経験できたことは人生を支える大きな柱となっている。現在、信大山岳会の全容は全盛期は言うに及ばず、僕らの頃と較べてもかなり厳しいものがある。しかし、組織としての限界は内包しつつ、各人の夢を実現する場に徹することができれば、まだまだ立て直しは可能と思う。山岳会はこうあるべき、という一つの教条に捕われることなく、一定の共通した経験・技術の上にオールラウンドな山行なり、垂直への挑戦が自由にできるような柔軟な活動、独創的な山行を目指してほしい、というのが今後の山岳会に対する個人的な感慨である。

## 昭和 53 (1978) 年度 リーダー雑感

リーダー 下田 章

1975年(昭和50年)、山岳会に入会した年は早30年以上も過ぎてしまい、今回の各年代の報告書のPDFを見て、いろいろ行ったんだと懐かしがってしまいました。

私が入学した年は授業料が月数千円の最後の年で、翌年から思いっきり上がったように記憶しています。当時の6年生の時代は月千円だったとか。

この年の新人合宿は30数名でそのうち新人が11名、その4年後の新人合宿は24～5名で新人は11名と人数の上では多少の減数ですが、大きく変わる過渡期だったような気がしました。あまり経験のなかった自分が、4年間(6年間)続けられたのも自分に合った山行が出来たおかげかと思っています。

思い出す範囲での1年からの山を挙げてみると、ひたすら山の大きさを感じた新人合宿に始まり、夏の縦走、奥又白谷での夏合宿A沢の恐怖、本谷での雪上訓練、又白の池での月を見ながらの食器洗い、何してるんやろこんなところかと思いつつサマーテント、秋山と押し流されてしまった。しかし秋の北又谷は当時のリーダーの吉田さんの報告にあるように、当時の自分としては思いっきりきつかった思い出がある。冬合宿前の不安な気持ち一杯で入山し、白馬の北方稜線の風の強かったこと、寒かったこと。春の黒部源流のスキー山行はこれまた初めてのスキーに、充実の山行でした。このあたりからのめりこんでいったかなと思います。当時は先輩が多かった、8年生まで含めるとオール信大で40名ぐらいいたのでは。ですから先輩と行く山は安心して行けたように感じます。先輩が多かったおかげでいろいろな形態の山を味わうことが出来たことは、よかったですと思います。後年自分たちが上級生になったときに、構成が大きく変わり多様な山行が出来なく

なり、合宿での習得も思うようにならなくなったことも、オール信大に移行した理由のひとつかもしれません。

2年生になり、後輩が出来ると生意気になり、口だけいっばし、GWの不帰、新人合宿、夏の縦走、劔岳の定着、劔岳の威容にただただ感動、山へいけることだけで満足の時代でした。あいかわらず合宿前は、興奮と不安で部室の前で寝たものでした。冬合宿の奥大日尾根からの劔岳、立山は自分の山行の中では印象の深いものでした。劔岳の登頂もさることながら、帰路のラッセルはその後の山行でもめぐり合わない程のもので、1日の工程500mの日もあったように覚えています。その中でも先輩たちへの安心感があり、このような感覚が信大の合宿(山行)を支えているのかと感じます。春はスキーをかついで知床へ、この頃から二俣さんとの個人山行が増えていったように思います。この知床行きも視野が広がったもので、広い斜面と流水、そしてヒグマの宝庫だったということを下山してから知った。

3年生になりL会のメンバーになりその責任と判断にプレッシャーを感じながら、ひたすら山の中にいたように思います。自分の中ではこの頃が一番日数多く山へ行っていたように覚えています。会の流れは岩-壁-ビッグウォールへと志向が向いていったように感じました。(今とは比べられないが)L会でもその辺の判断に迷うというか、意見が分かれることもあったようでした。SIMACではタカ派の師田さん、ハト派の二俣さんといった印象か、この頃からだいたい上田長野山岳部(SUNAC)とも個人山行レベルで行っていましたので、L会の判断の違いがありこの調整もSACとして必要と考え始めていました。

この年から夏合宿は劔岳となった(今までは

SIMAC は1年おきに奥又白と交代)と記憶しています。雪溪の状態が剣岳の方が安定しているのと壁の取り付きまでの崩壊が奥又のほうがはげしくなったようにも思いました。この夏合宿はSUNACと同じ熊の岩のBCで、行動は別でしたが冬合宿を見据えたものだったように思います。冬合宿の黒部の横断は4年生の計画立案、行動、上級生のサポートなくしては成功しなかったと思うし、ひとつの山行の形態として非常に評価できるものであったと思います。SACとしてまとめあげた山行として今後のSACの出発の起点だったように思います。このときの北仙人尾根でのドカ雪、三の窓での沈殿、帰路の大糸線でのことなど、忘れていたことが少しずつ思い出されてきます。自分の山行では滝谷の出合からの廻行、海谷の廻行、サマーテント(この年は30日くらいいたかな?)などが思い浮かびます。

4年次は新人11名を迎え、SAC総勢で25名での合宿でした、人数はそこそこでしたが構成がアンバランスになりつつあり、L会でもどうしよう

かと議題になったかどうかは定かではないが、この年の合宿は別に行くことにした。これは前年の冬合宿の反動かもしれないし、4年生の主張があったのかもしれない。またこの年ヒマラヤ遠征があり、現役2名と現役の先輩2名が隊員となったこともあり、山行全体の流れとしては1、2年主体といったものが多かったように思われた。結果冬合宿もかなり前年に比べると安易だったが、全員で目標を達成できたことだけが、唯一救われたように感じる。前年時剣岳の頂上での感慨とこのときの槍の頂上と決して同じではないが、自分としては両方味わえたことに満足している。

ズクは無かったけれど山を続けられたことは、周りの上級生、同輩、下級生に感謝したい。下級生には現役当時だしぶ無理を言ったようだが、今となっては勘弁してもらいたい。自分は5年次に遠征に参加させていただき(ガネッシュⅢ峰)またそこで、新人合宿を行っていたような気がする。今となっては遠い思い出だが、信大山岳会で過ごしたことは自分にとっての誇りである。



●キヌガサソウ